【35】

氏　名（本籍）	美山　治（京都府）
学位の種類	博　士（体育科学）
学位記番号	博甲第 3018 号
学位授与年月日	平成15年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	体育科学研究科
学位論文題目	アイヌ語身体部位語彙にみる身体観 －自然認識と身体の軸－

主　査	筑波大学教授	博士（教育学）	阿部生雄
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	佐藤臣彦
副　査	筑波大学助教授	教育学博士	清水　諭
副　査	筑波大学教授		高田　誠
副　査	筑波大学助教授	博士（教育学）	茂呂雄二

論文の内容の要旨

1．論文の目的

本論文の目的は，アイヌ語における身体部位語彙の用法を分析して，アイヌ文化における身体観を明らかにすることにある。アイヌの自然認識に基礎付けられて形成されてくる文化的な身体と身体運動に対する固有な観念を抽出することを目的としている。

2．研究の方法

本研究の主たる資料は辞書と口承文芸である。John Batchelor，知里真志保，中川裕，田村すず子等のアイヌ語辞典7種類を用いて身体部位語彙の概念と用法を分析し，その具体的事例を韻文で書かれたアイヌ叙事詩ユーカラ集，アイヌ神謡集等の口承文芸資料に求め，それらの中に見られる身体部位語彙の用例を検討した。用例の分析にあたり，①身体部位語彙の持つ象徴的役割を検討するために「身体部位語彙の象徴的用法」，②身体部位語彙の指示する場所を検討するために「身体部位語彙の対象的用法」，③どのような動きを記述する際に，どの身体部位語彙が選択されるのかを検討するために「身体部位語彙を用いた動きの記述」，④身体部位語彙が空間的な場所として用いられる場合を検討するために「身体部位語彙の場所的用法」の4つの視点を設定した。

3．論文の構成と要旨

第1章の「アイヌ語身体部位語彙の整理と把握」ではアイヌ語辞典に見られる身体部位語彙の全体を方言差にも注目しながら概観して整理した後，それらの身体部位語彙の中で用例の豊富に見られる語彙を検討対象として抽出することを課題とした。先ず「からだ」「胴体」をあらわすnetopa, tumam, kewをアイヌの身体観を検討する上で重要な語彙として抽出した。次いでやはり用例が豊富に見られる上肢に関する語彙では，「手部」(aske)，「手」(tek)，「肩」(tap) の語彙を検討の対象として選定した。下肢に関する語彙としては「足」(ure)，「脚」(cikir)，「脚」(kema)，「脚」(kir) を調査の対象として設定したが，「尻」(osor) については豊富な用例がみられる接頭辞ho-，o-を用いた動詞に着目した。同様にして，「頭」(sapa) の場合も「頭」を意味する接頭辞のhe-とe-の用法に注目した。

第2章の「『からだ』『胴体』を表わす語彙にみる身体の軸」では「からだ」と「胴体」を包括する語彙，netopa, tumam, kewに注目した。netopaとtumamは殆ど同義に用いられているが，帯を締める対象には専らtumamが用いられていることから，tumamは「胴体」を，netopaは「からだ」を表わすと解釈できる。しかし両語彙は共に象徴的用法において川や木の幹等の中心軸のイメージを持つ点で共通性を持つことを明らかにした。更にnetopaはinaw-netopaという祭具の軸の箇所を表わしており，アイヌ語の「からだ」や「胴体」には軸のイメージが伴うことが裏付けられた。一方「死体」や「骨格」をあらわすkewは，語根となって「腰」(ik-kew)，ok-kew（襟首），not-kew（顎），kir-kew（脚の骨，脛）等の合成語を作る。これらは全て身体を縦断する箇所に適用されていることが明らかになった。特にikkewは訳語的な「腰」という局所的なイメージよりも「背骨」を表現する場合が見られた。従って，身体を包括するこれらの語彙は，全て軸のイメージを持ち，その軸のイメージがアイヌの自然認識と密接な関係にあることが推測された。

第3章の「『上肢』に関する語彙にみる中心軸と分岐のイメージ」では「上肢」に関する語彙に身体軸のイメージがどのように現れているかを検討した。その結果「手」(tek) を語根とする「指」(tek-pet) や，「肩」(tap) を語根とする「腕」(tap-sut)，「二の腕」(makun-tap-sut) のような語根関係が見出された。これらの語根関係には「肩」を起点とする身体の軸から分岐する上肢イメージが明となった。つまり，からだや胴体は「川の本流」や「木の幹」をあらわし，tekは「川の支流」や「木の枝」を表現する語彙の語根であることが確認された。一方，tapにおいては，上肢の中で最も身体軸に近い部位として用いられ，身体軸からの分岐の起点と，そこから分岐した上肢のイメージを規定していることが理解できた。またtapは身体軸を回転させるような動きの記述において，身体軸から分岐して動く上肢のイメージを表現し，舞踊を表現する際にも用いられていることが判明した。このように上肢の持つこうした分岐のイメージは，アイヌ文化の自然認識と重なり合うことが類推された。

第4章では，「『下肢』に関する動きの階層性と中心のイメージ」では「下肢」に関する語彙に身体軸のイメージがどのように投影しているかを明らかにしようとした。ここでは最も頻出する「足」(ure)，「脚」(cikir)，「股」(cin)，「尻」(ho) の用語を分析した結果，これらの用語には階層性がみられた。ureは身体の最も低い部位を表し，床や地面近くの低い位置における動きの記述に用いられ，「脚」や「足」を意味するcikirは「脚」や「足」全体の動きの記述に用いられる。股を意味するcinは，例えば「足を上げる」や「またぐ」を表現するcin-puniの用法が示すように，より豊富な「下肢」の動きの記述に用いられていた。一方，「尻」を意味する接頭辞ho-，o-，を持つは動詞も数多く見出され，例えばhocikacikaは「足をばたばたさせてもがき苦しむ」を意味したように，下肢の動きを表現するものとして用いられた。また接頭辞のho-はhoripiのような「踊る，踊り」を意味する舞踊の用語を合成するものでもあった。

第5章の「he-，e-，ho-，o-を接頭辞とする動詞にみる身体の軸」では，接頭辞の「頭」を意味するhe-，e-と「尻」を表すho-，o-の用法を分析した。これらの接頭辞と結合する動詞は非常に豊富であるが，それらの殆どが同一軸上の上端と下端を想定した動きを表現するものであった。その具体的用例を，「顔を上げる」を意味するhepuni，「立ち上がる」を意味するhopuni，「頭を上げる」を意味するepuniに求めて分析した。hepuniでは，主に同一軸上の上昇運動を指示する用例がその多くを占めた。またhopuniには「立ち上がる」の他に「飛び上がる」，「(坂道)を登る」の用例が見られたが，その動作の主体には，人間以外に「柵木」(ras)，「焼き串」(imanit)，「太刀」(tam)等が見出され，それらの主体の全てが軸状のものであることが要求されていた。次に動詞epuniが取る目的語の種類を調べたが，人以外のものでは「イナウ」，「太刀」，「箸」など総て軸状の形を持つものであった。こうしたことから，接頭辞のheとhoは主体や目的語に軸を要求することが明らかとなった。そして身体部位語彙の用法と用例において，アイヌの自然認識と重なり合う身体軸のイメージが，名詞だけでなく動詞のレベルまで反映していることが示唆された。このことは日本の腰肚文化に比較し得るアイヌの身体軸を中心とした身体観の存在を示唆していると言えよう。

審査の結果の要旨

文字を持たないアイヌ語，そしてアイヌ語の伝承と話者の減少はアイヌ語研究の大きな障害となっていることは周知のことである。しかし言語からある民族の身体観を抽出するという手法は，文化的観念としての身体にアプローチする最も有力な方法である。日本人の身体観を相対化しようとする時，現在，同じ「日本」民族に属するアイヌ人の身体観や身体的所作の相違に注目することは，決して無意味なことではない。本論文はアイヌ語の身体部位語彙からアイヌの身体観を探り出すという点で画期的な試みを持っている。アイヌ人がその自然認識との比喩関係において身体軸を中心にした身体観を持つことを明らかにした点は高く評価できる。それは日本固有の身体文化である「腰肚文化」に比肩し得る新たな発見といえる。本研究で採用された方法論は，今後更なる検証と修正を経なければならないが，言語と身体観の関連を解きほぐす有力な手懸かりを提示した。つまり，身体部位語彙の概念，用法，結合語を特定資料から網羅的に検討し，それらを象徴的用法，対象物的用法，動きの記述，場所的用法という視点から整理して，身体部位語彙の概念と用法が無意識に内包している身体観を顕在化させようとする手法である。こうした研究手法は，身体観の研究という領域における一つの方法論の提起という点で注目すべきものがある。今後の課題として，アイヌの身体軸を中心とした身体観をフィールドワークで検証すること，韻文ではなく口語や日常言語から検証すること，他の文化圏の言語と比較することが残されたが，本論文はそうした課題を解決する上で重要な基礎的研究であると評価された。

よって，著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。